



12月10日 (土)
2016年 (平成28年)
発行所：東京都千代田区一ツ橋1-1-1
〒100-8051 電話：03(3212)0321
毎日新聞東京本社

25年ぶり副読本で紹介

農民戯作者の仙客亭柏琳

江戸時代後期に相模国磯部村(相模原市南区磯部)に住んで草双紙の農民戯作者として活躍した仙客亭柏琳(本名・荒井金次郎)が、2017年度に同市立中学校の生徒に配布される社会科の副読本「私たちの相模原」で紹介される。1992年度までの副読本には掲載されていたが、93年度の大規模改訂で削除されていたため、25年ぶりに「復権」。

来年度 相模原市立中生徒に

(大磯町)と誤記している書物もあり、同市教育委員会が副読本で、「郷土の誇る文化人」として改めて光を当てることとした。

草双紙は浮世絵師の挿絵入り娯楽本。柏琳の遺作で現存するのは、1830年代に刊行の「花吹雪縁柵」▽「星下梅花咲」▽「紫房紋の文箱」の3作だけ。3作とも当時、江戸で大人気の戯作者だった柳亭種彦が監修した。「花吹雪縁柵」は表紙を浮世絵の第一人者だった葛飾北斎、挿絵を歌川国芳が描いた。「星下梅花咲」と「紫房紋の文箱」の表紙、挿絵は開化絵で知られる歌川貞秀が絵筆を執っている。

【高橋和夫】



歌川貞秀が描いた「紫房紋の文箱」の表紙絵

江戸後期の相模国は、城下町だった小田原と東海道1868年1月に71歳で死去したとある。柏琳から5代目になる日相印刷(同区)の荒井徹会長、荒井功社長、兄弟が10月に「仙客亭柏琳 翻刻全集」を発売。柏琳が戯作者としてデビューしたいきさつが解明された。出身地を「相州大磯」と誤記している。神奈川県史、相模原市史などには柏琳を「草双紙農民戯作者」と紹介するが、江戸での作家(大磯町)と誤記している書物もあり、同市教育委員会が副読本で、「郷土の誇る文化人」として改めて光を当てることとした。

草双紙は浮世絵師の挿絵入り娯楽本。柏琳の遺作で現存するのは、1830年代に刊行の「花吹雪縁柵」▽「星下梅花咲」▽「紫房紋の文箱」の3作だけ。3作とも当時、江戸で大人気の戯作者だった柳亭種彦が監修した。「花吹雪縁柵」は表紙を浮世絵の第一人者だった葛飾北斎、挿絵を歌川国芳が描いた。「星下梅花咲」と「紫房紋の文箱」の表紙、挿絵は開化絵で知られる歌川貞秀が絵筆を執っている。

【高橋和夫】

1992年まで「私たちの相模原」に掲載されていません。

草双紙

女子や子供のための絵画本位の小説を草双紙といいます。表紙には、赤・黒・青・黄などの色をつけ、それぞれ「赤表紙」「黄表紙」などといわれました。

作者としては、仙客亭柏琳がいます。柏琳は、磯部村の10人で本名は荒井金次郎といいました。彼は、「星下り梅の早咲」という題名の草双紙を書いたそうですが、残念なことに現在、残っていません。

—平成4年度版—

昭和56年4月1日 初版発行
平成4年3月31日 第12版改訂発行度

編集 相模原市教育研究所
〒229 相模原市鹿沼台1-10-20
☎0427(56)3443(代)

発行 相模原市教育委員会
〒229 相模原市中央2-11-15
☎0427(54)1111(代)

印刷 大日本印刷株式会社(横浜)
〒221 横浜市神奈川区鶴屋町3-30-8
☎045(312)1371

18世紀中頃に現われた樹徳・淵光、19世紀などは、それら俳句をよんだ人の中でもすぐれた樹徳は、俳句をよんだばかりでなく、松尾細道「笈の小文」「続猿蓑」など十数冊の筆です。

相模原の俳人

- 樹徳
日光東照宮に詣る猿立ちの句
「東広き旅路や春の野の別れ」
箱根に遊びに行く途中、相模川を舟で下る
「百合に眼を残して行くや下り舟」
- 淵光
駿府(静岡)への旅の途中の句
「富士川や早瀬によろり下り船」
この旅から帰った時の句「猿蓑をぬげば美まきこ
- 利角 「權の戸や基の橋の落る音」
- 西風 「ゆくゆくは雨となろうか秋の風」

女子や子供のための絵画本位の小説を草双紙といいます。表紙には、赤・黒・青・黄などの色をつけ、それぞれ「赤表紙」「黄表紙」などといわれました。

作者としては、仙客亭柏琳がいます。柏琳は、磯部村の10人で本名は荒井金次郎といいました。彼は、「星下り梅の早咲」という題名の草双紙を書いたそうですが、残念なことに現在、残っていません。